

シナノ

これは「信濃の国」のはじまりの、そのまた、はじまりのお話です。

現在の長野県の北、山と山のあいだにはおおきな川が流れ、まわりには広大な平地が広がっていました。

雨がたくさん降ると、川は流れの幅を広げ、泥を平地いっぱい運んでいきます。川の泥には栄養がたっぷり含まれているので、植物が育つにはもってこいの場所でした。

この地にシナノという若者が住んでいました。

シナノは、洪水によって運ばれた土の力に注目し、細々と作られていたお米を、ムラ人みんなで協力して作ったら、もっと暮らしが豊かになるはずだと、考えました。

たしかにお米は保存できるので、収穫後も安定して長いあいだ、食べることができます。

「そりゃあ、いい考えだ。おらたちにも教えてくれ」

「なんしろ、食うもんが足りない。どんどん人が増えているからなあ」

シナノの話を聞いて、ムラ人たちはみんなでさっそく、作業に取りかかりました。最初のころは、思うように稲が育たず、がっかり肩を落とす年が何年も続きました。

ようやく稲穂が実り、豊作を喜びあえるときに、大洪水が押し寄せて全滅という年もありましたが、無事に収穫を終えた年には、ムラ中が喜びに包まれ、盛大にお祭りをして祝いました。

このムラを流れる川は、北の方角、それほど遠くないところで

海に流れこんでいます。

この川や川沿いの道をさかのぼって、また南からは日本の都とつながる道を通して、偉い人たちが盛んに往来し、人や物だけでなく情報や文化がたくさん入ってきました。

こうしてこのムラは、今の長野県の中心的な場所となっていたのです。

やがて、ムラ人たちのあいだに、自分たちの暮らすところに名前をつけようという機運が盛りあがりました。

お米がたくさん取れるようになったのは、お米作りのリーダーとなったシナノと、大きな蛇のようにしなやかに曲がりくねって流れる川のおかげなので、ムラは「シナノ（科野）」、そして川は「千曲川」と名付けました。

大きな功績を残したシナノが亡くなりました。

ムラのどこからも見えて、登ればムラとお米の田んぼすべてが見わたせる、高台にお墓をつくろうということになりました。

ムラ人たちは、未来永遠にシナノにムラを見守ってもらいたいと願い、お墓をつくるのに力を出しました。

原案 大谷善邦

文 野本洋子

発行 「月の都千曲民話紀行2025」実行委員会